

1-1. はじめに

- 本ワークショップの目標と進行

授業デザインの基本要素を学び、その成果を反映させたシラバスの修正版を作成することを目標とする

30分に1回程度、参加者同士の意見交換を交えながら進行する

- 自己紹介を兼ねて：今回用意したシラバスの概要と、作成時に一番悩んだ点を、3分程度で班員に説明して下さい
- シラバスに関する議論の展開

初めて答申でシラバスに言及（1991）～授業計画と学修支援の役割を果たしていない（1997）～卒業生の質を確保するため成績評価基準も載せるべきだ（1998）～設置基準改正（2007）

ref. 参考①

1-2. シラバスの役割

学生にとって

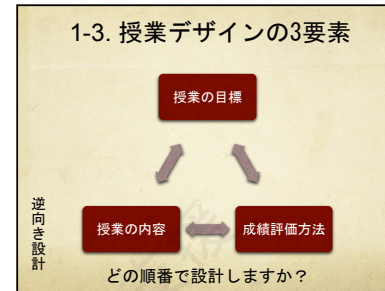
- 授業内容の確認：期待できる事と期待される事を自覚
- 学修計画の参考：必要な学修時間の予測と調整

授業担当教員にとって

- 学生との関係作り：教育観を伝え不幸な出会いを回避
- 授業設計の具体化：実施を容易にし、改善を促す

その他の人々にとって

- 教育内容／水準の理解：課程改善や単位互換で活用



2-1. 授業の目標

- 最低限の“意図する学修成果”を記述する
「教員が何をするか」ではない！
- 知識の修得に偏らない目標を設定する
知識・理解／能力・技能／関心・態度 ref. 参考②
- 目標の妥当性を検証する
状況的要因、教育課程の目的、社会の期待 ref. 参考③
→個別授業における領域の網羅が厳命ではない

2-2. 演習①

- 授業デザインワークシート
- 個人作業：①いま使っているシラバスに基づき、学修成果の領域別に3つの到達目標を記述し、対応する教育課程全体の目的を選択する。
②全ての領域と目的を網羅する必要はないが、既存の到達目標を整理し、複数の領域をカバーする。
- グループで共有：自分の内容を紹介し、複数の領域をカバーできない場合に助言し合う
- 全体で疑問点を共有

3-1. 成績評価方法

- 目標と整合的に“学修成果を把握”する
知識・筆記試験、技能・レポート/実技、態度・参加状況
- 学生へのフィードバックを考慮する
総括的評価と形成的評価、期末の課題はどちらか？
- 評価の規準／観点／基準（rubric）を明示する
学修成果の具体化 ref. 参考④
→事前提示による学修の方向付け

3-2. 演習②

- 個人作業1：①目標の重要度に応じて合計配点を決め、その分の学修成果を把握する方法を選択する。②ひとつの目標に対して複数の方法を用いる場合は、内訳を考える。
- 個人作業2：ルーブリック作成ワークシートを使って、学修成果BもしくはCに対応する課題について、ルーブリックを作成する。
- グループで共有：フィードバックの仕方を含めて成績評価方法を紹介し、ルーブリックの出来について検討し合う
- 全体で疑問点を共有

4-1. 授業の内容

- 目標達成に必要な“教育学修活動”で構成する
扱うテーマ+教員と学生の活動
- 能動的学修を取り入れる
能動と省察、知識の定着と能力の育成 ref. 松下(2015)
- 学修時間から発想する
1単位は教室内外45時間の学修から成る ref. 参考⑤
→目標の水準を考える目安に

4-2. 演習③

- 「教育学修活動と時間配分」を使用
- 個人作業：①授業時間内外における教育学修活動と、想定される所要時間を記述し、総学修時間を算出する。
②教育学修活動と関連する目標に所要時間を配分する。
③目標毎の合計学修時間と、それらが総学修時間に占める割合（＝学修時間配分率）を計算し、左頁の表に記入する。
④配点と配分率の差を確認し、10ポイント以上開きがある場合には、配点か授業内容を調整する。
- グループで共有：自分の内容を紹介し、総学修時間が短かったり、配点と配分率の差が大きかったりする場合に改善案を話し合う
- 全体で疑問点を共有

5-1. シラバスの修正

- 修正点確認票
- 個人作業：ここまで学んだ内容を受けて、事前提出したシラバスで想定していた授業設計を修正した点、およびその理由を記入する（修正のない部分は「変更なし」で可）
- グループで共有：どこをなぜ変更したかについて紹介しあう
- 全体で疑問点を共有

5-2. まとめ～check points 10

- ① 最低限の意図する学修成果を記述する
- ② 知識の修得に偏らない目標を設定する
- ③ 目標の妥当性を検証する
- ④ 目標と整合的に学修成果を把握する
- ⑤ 学生へのフィードバックを考慮する
- ⑥ 評価の規準／観点／基準を明示する
- ⑦ 目標達成に必要な教育学修活動で構成する
- ⑧ 能動的学修を取り入れる
- ⑨ 学修時間から発想する
- ⑩ 学生と互いの期待を共有する

授業デザインとシラバス作成
授業デザインワークシート

作成要領

- 事前提出したシラバスに基づき、学修成果の領域別に3つの目標を記述し、対応する教育課程全体の目的を選択します(全ての領域と目的を網羅する必要はないが、既存の目標を整理し、複数の領域をカバーする)
- 目標の重要度に応じて合計配点を決め、その分の学修成果を把握する手段を選択します(ひとつの目標に対して複数の方法を用いる場合は、内訳を考える)
- 右面を使って、授業時間内外における教育学修活動と、想定される所要時間を分単位で記述し、総学修時間(t)を算出します
- 教育学修活動と関連する目標に所要時間を配分し、目標ごとの合計学修時間(a~c)と、それらが総学修時間に占める割合(=学修時間配分率)を計算します
- 到達目標ごとに、合計配点と学修時間配分率の差を確認し、10ポイント以上開きがある場合には、配点か授業内容を調整します

構造化の確認

意図する学修成果 〔授業の目標〕	A.	B.	C.
学修成果の領域	知識・理解	能力・技能	関心・態度
対応する教育課程全体の目的			
学修成果の把握手段 〔100点満点中の配点〕	参加状況 [点] 平常時教室 [点] 平常時提出 [点] 期末時教室 [点] 期末時提出 [点] そのほか [点] (具体例:)	参加状況 [点] 平常時教室 [点] 平常時提出 [点] 期末時教室 [点] 期末時提出 [点] そのほか [点] (具体例:)	参加状況 [点] 平常時教室 [点] 平常時提出 [点] 期末時教室 [点] 期末時提出 [点] そのほか [点] (具体例:)
合計配点〔3つで100点〕	点	点	点
合計学修時間	(a) 分	(b) 分	(c) 分
学修時間配分率	(a/t) %	(b/t) %	(c/t) %
合計配点ー配分率=			

教育学修活動と時間配分

	授業内	授業外	所要時間	目標 A	目標 B	目標 C
第1回						
第2回						
第3回						
第4回						
第5回						
第6回						
第7回						
第8回						
第9回						
第10回						
第11回						
第12回						
第13回						
第14回						
第15回						
(期末試験)						
	総学修時間(分) = (t)			(a)	(b)	(c)

授業デザインとシラバス作成
ルーブリック作成ワークシート

作成要領

1. 授業デザインワークシートのB欄（能力・技能）もしくはC欄（関心・態度）に挙げた「意図する学修成果（授業の目標）」を下表上部に転記します
2. 転記した目標に対応する学修成果の把握手段を念頭に、評価の観点を設定します（当該目標に対する配点を考慮し、観点や水準（秀～可）の数を調整してかまわない）
3. 評価の観点毎に、授業終了時の最低基準「可」（それが達成できなければ単位を与えることが出来ない基準）を考えます
4. 評価の観点毎に、授業終了時の最高基準「秀」（それ以上の達成は不可能と想定される基準）を考えます
5. 達成の程度が区別できるように、優と良の基準を記述します

規準（意図する学修成果）：

	観点1：	観点2：	観点3：
秀			
優			
良			
可			

備考：

ルーブリックの例

基礎ゼミ「社会調査入門：学生アンケートをやってみよう」（東北大学、2016年度前期）

授業で期待する学修成果

- (1) 知識：社会調査の基礎知識を修得している
- (2) 能力：初歩的な社会調査を企画・実施し、結果をまとめて発表できる
- (3) 態度：グループワークや授業の充実に貢献できる

【(2) 能力】用のルーブリック

観点1：研究の質	観点2：発表の質
20点：テーマには独創性があり 分析結果や考察にも、文句の付けようがない	10点：十分に準備をしたことがわかり 質疑への対応から適切な役割分担が窺える
18点	9点
16点：適切なテーマが設定されており 分析結果や考察は一応納得のいくものである	8点：必要な準備はなされており 相応の役割分担がされている
14点	7点
12点：テーマ設定の根拠が不明で 分析結果や考察に明らかな矛盾がある	6点：準備が不十分であり、一部に 発表内容に対する理解不足が見られる

【(3) 態度】用のルーブリック

	観点1：他班の発表に対する 質疑、評価票	観点2：班員の相互評価	観点3：最終発表に対する 簡易レポート
秀 10点	半数を超える発表で質疑を 行い、評価票も提出	班員からの評価が、平均し て「多大な貢献があった」	鋭い指摘を含むレポートが 複数見られる
可 6点	口頭での質疑はないが、評価 票は出している	班員からの評価が、平均し て「どちらとも言えない」	他班に対して、求められた 内容を記述している
備考： 採点 の 詳細	・4班が2回ずつ発表するので、質疑 評価票記入の機会は6回 ・質疑は1回につき1点 ・記入漏れのない評価票提出で1点	・「多大な貢献があった」から「全く 貢献していなかった」の5段階で班員 (本人を含む)を評価 ・平均点を2倍して得点とする	・各班(自班を含む)の最終発表に対 し、優れている点と改善できる点をレ ポート(4枚提出) ・作成時間は1枚5分程度

参考①：シラバスに関する議論の変遷

大学審議会（1991）

学生の学習意欲の向上を図り、学習内容を着実に消化させるためには、大学の側において、教育の教授内容・方法の改善・向上への取組（ファカルティ・ディベロップメント）、授業計画（シラバス）の作成・公表、充実したカリキュラム・ガイダンスなどを積極的に推進する必要がある（222頁）。

大学審議会（1997）

平成3年の大学審議会答申以後、既に多くの大学でシラバスの作成が行われており、一定の成果をあげている。しかしながら、現在のシラバスの多くは、学生に履修科目選択のための情報を提供する履修科目の一覧としての役割と、履修する個々の授業科目について詳細な授業計画を示すとともに学生の教室外における準備学習等についての指示を与える役割という2つの役割を果たすものとして作られており、必ずしも本来シラバスが果たすべき後者の役割を十分果たす内容になっていない面がある（312頁）。

大学審議会（1998）

学生の卒業時における質の確保を図るため、教員は学生に対してあらかじめ各授業における学習目標や目標達成のための授業の方法及び計画とともに、成績評価基準をシラバスなどに明示した上で、厳格な成績評価を実施すべきである（63頁）。

（以上、高等教育研究会編（2002）より）

中央教育審議会（2012）

学生に事前に提示する授業計画（シラバス）は、単なる講義概要（コースカタログ）にとどまることなく、学生が授業のため主体的に事前の準備や事後の展開などを行うことを可能にし、他の授業科目との関連性の説明などの記述を含み、授業の工程表として機能するように作成されること（15頁）。

大学設置基準第二十五条の二（2007年追加）

1 大学は、学生に対して、授業の方法及び内容並びに一年間の授業の計画をあらかじめ明示するものとする。

参考②：知識の修得に偏らない目標を設定する

- ・ ブルームの3領域：認知的領域、情意的領域、精神運動領域
- ・ ガニエの5分類：言語情報、運動技能、知的技能、認知的方略、態度
- ・ OECDの3つのキー・コンピテンシー：自律的に活動する力、道具を相互作用的に用いる力、異質な集団で交流する力
- ・ 学習指導要領の3つの力：基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等、主体的に学習に取り組む態度

（稲垣・鈴木編著（2011）参照）

参考③：目標の妥当性を検証する

東北大学（学士課程）のディプロマ・ポリシー

東北大学では、次に掲げる目標を達成した学生に学士の学位を授与する。

- ① 専門分野に関する知識及び学問分野全体への興味関心と幅広い知識に基づく複眼的視野を有している
- ② 教養ある社会人としての素養を備え、専門分野特有の技能を生かして社会に貢献できる
- ③ グローバル社会において、指導的・中核的役割を果たす自覚と展望を持ち、基礎能力を備えている
(<http://www.tohoku.ac.jp/japanese/disclosure/disclosure/09/education0901/>より転載)

学士力に関する主な内容

1. 知識・理解：専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解（多文化の異文化に関する知識の理解、人類の文化・社会と自然に関する知識の理解）
2. 汎用的技能：知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能（コミュニケーション・スキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力）
3. 態度・志向性：自己管理能力、チームワーク・リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力
4. 統合的な学習経験と創造的思考力：自らが立てた新たな課題を解決する能力
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryu/attach/1247211.htmより転載)

参考④：評価の規準／観点／基準を明示する（申本の担当授業で使用している例）

規準：“大学は「学校」か”という問いに対し、自分なりの議論を展開できる

観点1：必要な知識を学び活用できる（4点満点／出典明記の不備や事実誤認は減点）

- 4点：授業で扱っていない資料から引用された事実が用いられている
- 3点：授業で扱った資料の中の、紹介していない事実が用いられている
- 2点：授業で紹介された、もしくは明らかになった事実のみが用いられている
- 1点：意見や経験、憶測のみが示されており、事実が用いられていない

観点2：説得力のある文章を書くことができる（4点満点／論理展開の不備は減点）

- 4点：複数の観点に係る事実から種差を考慮した定義を導いた上で、結論が述べられている
- 3点：複数の観点に係る事実から定義を導いた上で、結論が述べられている
- 2点：単独の観点に係る事実から定義を導いた上で、結論が述べられている
- 1点：定義は不明確だが、結論は述べられている

観点3：要求された書式を守ることができる（2点満点/減点方式）

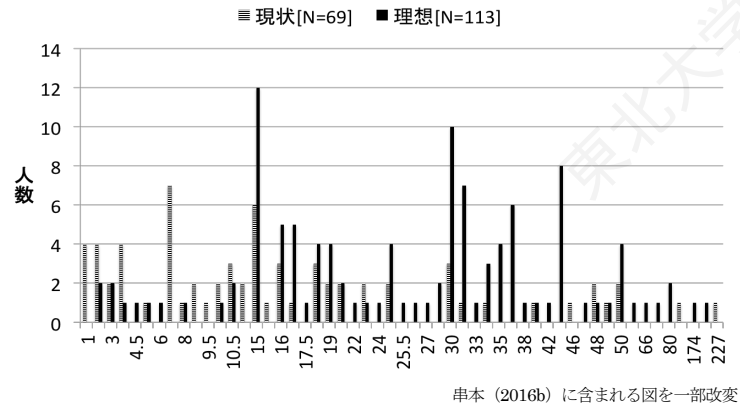
誤字脱字、分量（9割未満-1点）、丁寧さ（読み難いもの-1点）

参考⑤：学修時間から発想する

大学設置基準第二十一条

- 1 各授業科目の単位数は、大学において定めるものとする。
- 2 前項の単位数を定めるに当たっては、一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする。
 - 一 講義及び演習については、十五時間から三十時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもつて一単位とする。
 - 二 実験、実習及び実技については、三十時間から四十五時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもつて一単位とする。ただし、芸術等の分野における個人指導による実技の授業については、大学が定める時間の授業をもつて一単位とすることができる。
 - 三 一の授業科目について、講義、演習、実験、実習又は実技のうち二以上の方法の併用により行う場合については、その組み合わせに応じ、前二号に規定する基準を考慮して大学が定める時間の授業をもつて一単位とする。
- 3 前項の規定にかかわらず、卒業論文、卒業研究、卒業制作等の授業科目については、これらの学修の成果を評価して単位を授与することが適切と認められる場合には、これらに必要な学修等を考慮して、単位数を定めることができる。

教員から見た全学教育講義科目（2単位）における授業外学修



参考資料

全般

高等教育研究会編 (2002) 『大学審議会全 28 答申・報告集』ぎょうせい。

Fink, L. Dee (2003) *Creating Significant Learning Experiences*. Jossey-Bass.

Wiggins, Grant and McTighe, Jay (2005) *Understanding by Design 2nd edition*. Pearson.

佐藤浩章編 (2010) 『大学教員のための授業方法とデザイン』玉川大学出版部。

Biggs, John and Tang, Catherine (2011) *Teaching for Quality Learning at University 4th Edition*.

Open University Press.

稲垣忠・鈴木克明 (2011) 『授業設計マニュアル』北大路書房。

中央教育審議会 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて (答申)」。

濱名篤ほか編著 (2013) 『大学改革を成功に導くキーワード 30』学事出版。

串本剛 (2015) 「第 4 章 1 学期の授業をデザインする：シラバス作成を手がかりに」羽田貴史編著『もっと知りたい大学教員の仕事』ナカニシヤ出版、62-75 頁。

授業の目標

Anderson, Lorin W. and Krathwohl, David R. eds. (2001) *A Taxonomy for Learning, Teaching, and*

Assessing: a revision of Bloom's taxonomy of educational objectives. Longman.

中央教育審議会 (2008) 「学士課程教育の構築に向けて (答申)」。

松下佳代編著 (2010) 『(新しい能力) は教育を変えられるか?』ミネルヴァ書房。

成績評価方法

Quinlan, Audrey M. (2006) *A Complete Guide to Rubrics*. Rowman & Littlefield Education.

田中耕治 (2008) 『教育評価』岩波書店。

Burke, Kay (2011) *From Standards to Rubrics in Six Steps*, 3rd edition. Corwin.

スティーブンス・レビ (佐藤浩章監訳) (2014) 『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部。

串本剛 (2016a) 「学士課程教育における形成的評価と学修成果の関係：国立研究総合大学を事例とした分析」『大学教育学会誌』38(1)、137-143 頁。

教育学修活動

Bonwell, Charles C. and Eison, James A. (1991) *Active Learning: creating excitement in the classroom*. ASHE-ERIC Higher Education Reports.

河合塾編著 (2011) 『アクティブラーニングでなぜ学生が成長するのか?』東信堂。

溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂。

松下佳代編著 (2015) 『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房。

串本剛 (2016b) 「授業時間外学修の認識と想定：45 時間学修を前提とした授業設計」『第 2 回 東北大学教育調査研究会』7 月 4 日@東北大学、配布資料。

授業デザインとシラバス作成
修正点確認票

授業の目標	
修正点	修正した理由
成績評価方法	
修正点	修正した理由
授業の内容	
修正点	修正した理由